

久保田 琳

KUBOTA Rin



実りの音

紙本着彩

実りの音

柘榴は古くから様々な地域で豊かさを象徴する吉祥果とされてきた。たわわに実る柘榴に「実り多き未来になるように」という思いを込めた。タイトルの「音」は「良い未来が近づく足音」の響きに乗せた希望である。

私は柘榴の造形の美しさと皮に潜んだ毒の暴力性、それらの魅力に引き込まれ、以前から作品のモチーフとして描いてきた。植物である柘榴は当然のことながら言葉を発さず、意思表示ができない生き物であるからこそ、その確かな佇まいは私の気持ちを前に進ませ、強くさせてくれる。

植物と接するときには言葉を必要としない。ただそこに存在する自然のなかでは、私もただそのままで良いのだ。このような関係性で成り立っている空間に居るとき私はとても心地よく感じる。植物は決して私に懐かない存在であるにもかかわらず、何故か愛おしく、ずっとここにいたいと感じさせる。あらゆる生物にとって自然は「自身をとりまく環境」そのものであり、その中で植物は置かれた環境に順応しながら最大のパフォーマンスを発揮する。私はそんな植物に対して畏敬の念を感じると共に、安心感を得ているように思う。壮大なスケールの山々や空も私を心地よくさせてくれるが、それよりも普段身の回りに生息する身近な植物が淡々と自然の循環の中に身を置き、誰に教わった訳でもなく何千年、何万年に渡り力強く生きている真摯な姿に惹かれる。

先の分からないこれからの人生を歩んでいく私達も日々を模索しながら懸命に生きている。苦労や試行錯誤の先にやがて来る「実り」を私達は共に待ち、祝福したい。その時の為に日々を大切に生きながら幸福の「音」を聞き逃さぬように在りたい。